

A Reconsideration of the Contemporary Comment on Yu Dafu in 1920's

李, 麗君

九州大学大学院言語文化研究院 : 招聘外国人教師 : 現代中国語学

<https://doi.org/10.15017/19187>

出版情報 : 言語文化論究. 26, pp.131-144, 2011-02-07. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



1920年代における郁達夫の同時代批評再考^①

李麗君

郁達夫 (Yu Dafu, 1896-1945) についての批評史・研究史に関して、近年の中国における業績の整理を試みる中で、これまでの、特に1980年代以後の郁達夫研究^②において、郁達夫に対する同時代批評の整理検証が十分に重視されていないことに気付いた。同時代批評は、後世の研究・批評にはない、作家と時代を共有するという貴重な資料であり、かつ、その作家についての直接的な種類の記録も含んでおり、批評史、研究史ばかりでなく、作家とその文学を包括的に考える際に欠かせないものである。こうした「資源」を吟味し有効に活用することで、できるかぎり歴史の現場に立ち戻り、根拠の乏しい「推測」や「想像」を排し、より客観的に郁達夫文学を見つめることができると考える。本論では、主に中国における郁達夫研究を考察対象として、1920年代、特にその前半、即ち郁達夫が文壇に登場してから作家として広く認知されるまでの文学者形成期に、郁達夫文学がどのように読まれてきたかを中心として、ポイントを押さえた史的考察を行い、改めて郁達夫研究の発生と進展の跡付けをしながら、これまでの郁達夫研究の基本的枠や概念の由来を的確に把握し、郁達夫研究の今後及び郁達夫文学そのものについても考えてみたい。

一 矛盾による最初の郁達夫批評

小説集『沈淪』(1921.10)の出版は、作者郁達夫本人も予想だにできなかった鮮烈な文壇デビューとなった。それ以前、郁達夫はすでに漢詩や小説も発表していたが、あくまでも活動拠点を日本に置いていた一留学生であり、まったく無名な者であったため、当然ながら、一般の読者から名も知られていない存在だった^③。ところが、『沈淪』の出版によって、良い意味でも悪い意味でも、「革命」あるいは「爆発」と言っても良いほどの衝撃を社会に与えたのである。

当時の中国社会において、「沈淪」が引き起こした大きな反響の理由は、実にその単純な「性質」に存在していると言える。それは、まず、小説の中身の面で、中国の儒教社会において一貫して「禁忌」視されてきた人間の性、特に青春期の性的発動・苦悩というものを正面から取り上げた点にある。次に、作品の描写方法の面で、近代日本の「私小説」的な手法を用い、刺激的な内容をまったく恐れず、それを赤裸々に描き出したものあり、当時においては空前絶後とも言えるものであった点である。読者からは様々な反応があったが、儒教社会における古い伝統・道徳に基づく束縛に不満を抱き、感情や欲望の解放を求め、それを自由に表現しようとした若者たちは、この小説から伝統的道徳、社会的規範に反抗する勇氣、あるいは痛快ささえも感じ取ったのである。彼らは、この小説に含まれた種種の問題点より、その伝統・道徳を無視し、それに反逆する郁達夫に親しみを感じ、彼を自分たちの仲間ないし代弁者として受け止めたのかもしれない。

当時中国で最も近代的な都会だった上海に、「沈淪」という作品を受け入れる条件、特に読者層が存在したことは、郁達夫にとって、幸運なことであった。関連する研究^④によれば、上海では、20世紀初頭以降、急速な経済的発展と新聞雑誌出版業の繁栄につれて、膨大な人口を擁する読者層が形

成されていった。当時の読者層には、伝統的な文人趣味を保つもの、職業や都会での生活、教育などを求め、上海周辺から「移民」してきた若い読者、急速に拡大しつつある市民階層という三つがあった。彼らは「沈淪」という作品の中に、貧乏、孤独、流浪の生活による苦しみ、安定した生活への強い願望を持つ移民青年と、閉塞した時代の雰囲気や古い道徳規範を破り、個人の解放・開放を求める市民階層の思いを見出した。その結果、「沈淪」は多くの若者から理解と支持を集め、彼らの意識の解放、自由の追求、そしてストレスの「発散装置」のような機能をも果たした。「一群の病的な若者から大変に好まれ、二万冊余りも売れた」^⑤という。「沈淪」は、作者の郁達夫にとってはあくまでも忠実な自己表現にすぎなかったが、しかし読む側にとってはまさしくそれが伝統的道徳への反逆、一般的な社会の価値観への挑発とも受け止められた。したがって、「沈淪」の成功と人気は、その文学作品としての完成度の高さによるものではなく、その激動の時代や、特にその時代を生きる若者の欲求と合致したところにむしろ求められるという点を、強調しておきたい。

しかし、当初、この作品への一般社会の反応は否定的なものも少なくなかった。郁達夫本人も、「この年の秋になってから、『沈淪』は単行本として出版されたが、人々はまだこのような畸形の新しい書物を見慣れていなかったため、嘲笑や非難を数知れず受けることになった」^⑥と述べている。その要因は「沈淪」が露骨に性的心理・欲望を描写し、伝統的道徳から逸脱したといえる点にある。この点については、郁達夫と同じ陣営に属した成仿吾（Cheng Fangwu, 1897-1984）^⑦がいち早く『創造』季刊第1巻第4期（1923. 2）に「創造社と文学研究会」という論文を発表し、自分たちの真意の説明に動き出した。

我々の創作には、両性問題に取材したものが多かったが、それは、我々がみな生命力を求め、若者で、まだ厳粛な教訓的な道徳を主張する年齢になってなかったからである。それから、「デカダン」という言葉は、もともと旧派が新興勢力を嘲笑する際に使われたもので、「頹廢」と訳されたのはもとより好ましくない。郁達夫の小説には、「デカダン」のようなものがそれほどないし、「頹廢」的なものはなおさらない。彼自らが描写する質夫（郁達夫の複数の小説に登場している主人公－李注）は、一人の若者の赤裸々な告白にすぎない。一般の人々は彼の作品を誤解しているのである。（下線は李による。以下同）

ちなみに、「沈淪」に対する非難や嘲笑のほとんどが活字の形ではなく、あくまでも坊間の風評であったため、今日、当時の社会的反応を研究する場合、上述の作家本人や他の関係者による当時の状況記述や回想にしか頼れないという状況が存在する。一方、「沈淪」に対する同時代批評は、明確な文章として発表されており、穏当で、作品に即した精査に耐えられるものが多い。日本から帰国したばかりの「創造社」系作家たちは、「実績」という点からは、「文学研究会」系のような、すでに国内文壇で確固たる基盤や人脈を作り上げた文学者たちと異なり、最初は、他の陣営から喝采されることはあまりなかった。ところが、意外にも、「沈淪」に対して最初に評価のメッセージを送ったのは「文学研究会」派であった。「文学研究会」派の主要メンバーである茅盾（Mao Dun, 1896-1981）^⑧が一早く郁達夫に注目したことは重要で、『沈淪』出版の四カ月後、1922年2月、茅盾は「文芸時評」の中で、温和な態度と好意をもって、次のように『沈淪』を論じている。

『沈淪』中の三編に、私はひととおりの目を通したことがある。第二編「銀灰色の死」を除けば、他の二編はいずれも作者の自叙伝（ある富陽県出身の友人の話によるとそうであった）のようで、そのためその描写はまことに真摯たり得るのである。第一編「沈淪」の主人公の性格

については、その描写は真摯で、終始一貫している。そこには、主人公の心理状態の変化もある程度示されている。この点で、作者が成功していることを私は認める。しかし、作者が自序で述べている霊と肉体の衝突に関しては描写は失敗だ。^⑥

ここで提示された三つのポイント、自叙伝風なもの、真摯な描写、主人公の心理変化の軌跡というものは、的確に『沈淪』の性質を把握していると言えよう。また、しばらくの後、茅盾は再度文学研究会『文学旬刊』（1922. 6 第39期）で『沈淪』を援護するようにも読み取れる発言をしている。

「茫茫夜」の作者郁達夫君には「沈淪」という小説があり、皆様もそれを読まれたらう。今、この「茫茫夜」の中の「善への焦燥と悪への苦悩」という言葉はまさに「沈淪」に送る賛辞とすることができよう。「沈淪」の描写には欠陥があるかどうか、この作品が誤って読まれることで、現代中国の青年に対して悪影響があるかどうかということについては、コメントを控えたいと思うが、「善への焦燥と悪への苦悩」という点においては、「沈淪」の主人公は実に親しみが持て、同情されるべき点があると考える。生まれつきの賢人、あるいは表面は温順に見えるが、心は卑劣な、賢人と自称する人々を除けば、凡そ現代の青年は誰もが「善への焦燥と悪への苦悩」を感じているに違いないだろう。^⑦

茅盾は、『沈淪』の独特な内容は読者の受け止め方によって「悪影響」のようなものが生じるかも知れないとしつつも、「沈淪」の中身そのものが作者の体験に忠実で、誰にもありうるものだと指摘し、「沈淪」の「背徳」議論と異なる持論を展開している。この批評は、最初期の郁達夫批評が対立した相手とも言える派閥からなされたものであったにも関わらず、その内容は穏当で好意的、肯定的なものであったことを示している。当時、茅盾はヨーロッパの自然主義、リアリズム、象徴主義などの文学理論の紹介活動を精力的に行なっており、そうした彼の広い視野が彼の郁達夫文学に対する批評的立場に大きく関係しているようであり、これは実に興味深いことだと言えよう。しかし、郁達夫研究史において、このいち早く現れた郁達夫批評が正面から取り上げられたことのないということは、実に不思議なことである。当時の茅盾自身はまだ若手の文芸批評者であって、この評論も文学研究会の機関誌『小説月報』の編集者として「編集者のことば」のような形で新しい作品について紹介とコメントを述べたものであり、厳密な意味での研究・評論とは言えず、その影響力にも限りがあったからではないかと思われる。

二 周作人「沈淪」論の歴史的意義

茅盾『沈淪』評論発表の一ヶ月後の1922年3月、当時北京大学教授であった周作人（Zhou Zuoren, 1885-1967）^⑧は、「沈淪」（1922. 3. 26『晨报副鐫』）を題名とする有名な評論を発表した。それが後に郁達夫文学批評史上の最も重要な文献になったことは、すでに周知のとおりである。著者は「沈淪」を取り上げる理由を論文の最初の部分で次のように説明している。

郁達夫氏の創作した小説集『沈淪』を語る前に、「背徳の文学」ということについて少し私見を述べなければならぬ。なぜなら、現在、彼の「沈淪」がかなりの人から背徳の文学と言われているからだ。

周作人はいわゆる「背徳の文学」の定義から、「沈淪」には「猥褻な要素があるけれども、背徳と

いう性質ではない。「作品に描かれているのは現代の若者の苦悩そのものである」と力説した上、「『沈淪』は芸術的作品であるが、普通の人の読み物ではなく、「受戒者の文学」だ」と、理解を示し、高い評価も与えている。

周作人の「『沈淪』援護」の由来には、いささかの経緯があった。それについては、日本人研究者の鈴木正夫が既にその論文で触れている⁹。一方、中国においては、これまでそれが言及されることはなかった。以下、その経緯について、文献資料に基づき確認を行う。郁達夫『沈淪』の出版発売は1921年10月のことであるが、その発売によって激しい批判的な議論が巻き起こり、郁達夫は苦境に追い込まれた。そこで、郁達夫は『沈淪』出版後二ヶ月足らずで周作人に助けを求めることにした。1921年11月27日、郁達夫は教鞭を執る安徽省安慶市から周作人へ『沈淪』評論執筆依頼の葉書を送っている。その中で、自分が苦しい状況に陥っており、なんとか手を差し延べてくれないかと訴えているのである。

葉書は英語で書かれた短いもので、内容は次のとおりである。

(原文)

Very Esteemed Mr. Chou :

Pardon me for my ungentlemanliness! With this card I send you a book of short stories, which was published last month, "Drowned". I hope that you will criticise it as candid as your conscience allows. All the literary men in Shanghai are against me, I am going to be buried soon, I hope too that you will be the last man who gives a mournful dirge for me!

Your Admirer

T. D. Yüewen

(日本語訳)

尊敬する周先生：

まずは自分が紳士の風格に欠いていることをご容赦ください。この葉書とともに先月出版したばかりの短編小説集『沈淪』を送らせていただきました。私の作品に対して良心の許す限りの率直な批評をいただけることを希望いたします。上海のあらゆる文人はみな私に反対しています。私はまもなく葬られることになるでしょう。貴方が決して私に挽歌を捧げる人にならないことも希望します！

貴方を敬愛する者

T. D. 郁文⁹

短い内容だが、郁達夫の幾分かの絶望感がはっきり読み取れる。幸いに、一方の当事者である周作人に、この件に関する詳しい「記録」が残されている。『周作人日記・中冊』（影印本、1996. 12 大象出版社）には、当時の交渉の様子が詳細に記されている。

1921年11月30日

晴風上午往大学下午返得郁達夫君片清華校文学社函。

（晴れ、風。午前中は大学へ出る。午後帰宅。郁達夫君からの葉書、清華学校文学社（文学サークルのこと—李注）からの便りを受け取る。）

1921年12月4日

晴上午得郁君寄贈沈淪一本……。

(晴天。午前中に郁君から贈られた『沈淪』一冊を受け取る。)

1921年12月10日

晴上午寄郁達夫君函……。

(晴天。午前中に郁達夫君へ手紙を出す。)

1922年3月26日

(「沈淪」を題とした、郁達夫を擁護する周作人の論評が『晨報副鑄』に掲載される一季注)

1922年4月17日

晴上午往大学午返下午同吳君談得萬風振鐸函郁達夫君十一日函……。

(晴天。午前中は大学へ。昼帰宅。午後は吳君と談話。萬風、振鐸から手紙を、郁達夫君からの11日付手紙を受け取る。)

上記の日記中に言及された私信の中で、現在確認できるものは最初の郁達夫の葉書だけであるが、二人の文通の過程から周作人の「沈淪」批評発表の経緯は見当がつく。この葉書の中で、郁達夫は「沈淪」が非難的になっていることを訴え、周作人に批評してくれるよう依頼している。12月4日に、郁達夫から贈られた『沈淪』が届いたが、『沈淪』読後の12月10日に周作人は返信を送ったのだろう。1922年3月26日に周作人の「沈淪」批評が『晨報副鑄』に掲載されており、4月17日の郁達夫の手紙はそれへの返礼と思われる。

周作人の「沈淪」評論誕生の経緯を考察する中で、もう一つの重要な問題が浮かび上がってきた。すなわち、世間からの非難的になるという厳しい状況の中で、郁達夫がなぜ他の人でなく、周作人に助けを求めたのかということである。結論的に言えば、郁達夫には、周作人こそが自分の小説を一番理解してくれる人であるという確信があったと思われる。こうした点を調査し整理することで、全体の経緯構図が見えてくるとと思われる。まず、郁達夫と周作人の間にはいくつかの共通点がある。同じ日本留学出身、日本及び日本の文化に対する精通と理解、倫理観においての人道主義重視、人間の本性や複雑性を認める文学理念などは、郁達夫が決定的に重要な時点で周作人に救援を求める理由となったに違いないだろう。特に文学理念においては、以下の点が指摘できる。周作人は『沈淪』出版の三年前に「人間的文学」(「人的文学」、1918. 12『新青年』5巻6号)を題とした論文を発表し、中国文壇に革命的な問題提起を行なった。その論文では、まず「人間的文学」という概念を呈示し、人間的文学は人間性に叶う人間の肉と霊の一致した生活を根本とするものであり、それこそが提唱すべき新文学だと強く主張する。ある意味で、周作人こそが最も早く自由の精神と人間主義を中国近代文学に持ち込んだのである。これこそがまさに郁達夫と周作人を繋いだ思想的な背景であるといえるだろう。

周作人の「沈淪」批評では、まず正面から「背徳の文学」という非難に立ち向かい、「郁達夫さんの創作した小説集『沈淪』を語る前に、私は「背徳の文学」という問題について話さなければならぬ。なぜならば、現在、それを背徳の小説となさっている人がかなりいるからだ」、「私は人が道徳の名を借りて文芸を批判することをしてほしくない⁸⁾と、「沈淪」を擁護するスタンスを示している。その方法としては、「沈淪」を中国人の伝統的道德感覚から切り離し、欧米流の「文学上の色情」に対する考えで捉えなおすものであった。それによれば、「沈淪」は「背徳の文学」の類に属せず、あくまで「無意識の、非端正な文学」にすぎなく、「猥褻な要素があるが、背徳の性質ではない」ということになる。さらに、「沈淪」は「芸術的作品」、「受戒者の文学」だと結論付けている。周作人のこうした批評は、当時の普通の中国人の伝統的道德感覚をはるかに超えるもので、西洋の

道徳観念文芸観念を取り入れ、文芸批評の次元ですぐれた『沈淪』論を呈示したものであるとすべきであろう。

同時に、中国社会に暮らし、日本のこと、日本にいる中国人留学生の生活状態を知らない人々にとって、「沈淪」に描かれた自分たちとは異なる人生経験や新しい小説スタイルには理解することが困難な要素が存在していた点も重要である。この点に関しては、郁達夫自身も「日本に滞在したことのない人は必ずしも本書の真価を理解できないし、文芸に対して真摯な態度を持たない人は本書の価値を批評する資格がない」⁸と、率直に自らの考えを述べ、読者からの理解を求めている。周作人はオープンな文学者、学者としての視野や柔軟さを持つとともに、郁達夫と同じく長い日本留学経験の持ち主でもあり、「沈淪」に描かれた生活と情感の世界の経験者・理解者・共感者であったことは、文壇に登場したばかりの郁達夫にとって、大きな幸運でもあったろう。

文学者、しかも北京大学教授という地位にある周作人の「応援」は、「沈淪」を背徳の文学として激しく非難し、それを封じ込めようとする動きに歯止めをかける役割を果たした。それ以降、道徳のレベルで「沈淪」を無理やり否定するような言論はその多くが文壇から姿を消した。後年、郁達夫は感謝の意味もこめて、その経緯を次のように記している。「後に、周作人先生が北京の『晨报副鰲』で私を弁護する批評を発表したことで、人を淫らな行為へ誘導しているものだ、わざとらしいものだ、とした文壇の壮士たちはようやくその罵声を収めた」⁹。長い間、郁達夫に対して批判的な立場を取ってきた作家蘇雪林も、「1921年、郁達夫は小説集『沈淪』を出版し、上海文学界から激しく非難されたが、当時の批評界で最大の権威である周作人はわざわざ彼を援護する論文を書いた。それからは批判がなくなっただけではなく、「沈淪」がなんと「受戒者の文学」となり、郁達夫もそれで有名になった」¹⁰と、不満をあらわにしながらも、周作人の影響の大きさを認めた。

その周作人の「沈淪」批評について重ねて強調しておきたいのは、当時、周作人を含めた論者たちの焦点が、「沈淪」の作品としての内部構成ではなく、専ら作品に現われた道徳観、作者の私生活の暴露という外部世界に当てられていたことである。したがって、周作人の批評は、窮地に追い込まれた郁達夫を助けただけでなく、性的な内容を描いた作品を伝統的儒教の立場から道徳・人格のレベルで安易に否定する動きにもある程度ブレーキをかけ、タブーを打破し、文学創作の表現空間がより広がる方向に、大きな力を発揮したことになる。さらに、郁達夫個人にとっても、周作人の強力な応援がなければ、その後の作家郁達夫はなかったかもしれない。

三 成仿吾の批評及びその他

同じ創造社の一員である成仿吾は、主として評論家として活躍し、常に郁達夫の良き理解者・支持者であった。彼の『『沈淪』の評論』（1923. 2）は、『沈淪』批評史上重要なものとしてしばしば引用される。同一陣営に属する戦友という立場で、成仿吾は当然ながら仲間に対して熱烈な応援をしている。

郁達夫の『沈淪』は新文学運動以来のはじめての小説集である。『沈淪』は、出版された年月において第一（最初の作品—李注）であっただけでなく、その人を驚かす題材と大胆な描写は、発表してからすでに一年経った今日においても、なお第一（即ち、『沈淪』を超えたものが未だにない—李注）と言わなければならない。¹¹

しかし、『沈淪』の表現の世界に関しては、成仿吾はまさにその誠実な批評者の良識と鋭さを存分に見せてくれる。彼は、郁達夫自身の「霊と肉の衝突」という「沈淪」のテーマの解釈に対して、

率直に疑問と反論を投じた。「『沈淪』が世に出て以降、多くの人はそれを霊と肉との衝突を描いたものと考えており、今日まで異なった意見を聞いたことがない。それでは、『沈淪』は本当に霊と肉との衝突を描いた作品なのだろうか。私はこの点に対して甚だ疑問を持っているのだ。」⁹ さらに、『沈淪』の主人公はただ肉体の欲求を満足させえないために、日々悩んでいるのだと言い切った。つまり、主人公の苦悩は決して「霊と肉との衝突」云々に由来するものではなく、主人公の切望する「愛」が実現不可能なために生じたものなのであると、断言している。郁達夫の親友として、成仿吾はかつて東京留学滞在時代に、『沈淪』をめぐる郁達夫と意見交換をし、郁達夫は、自分（成仿吾のこと—李注）の以上のような考えを認めてくれたというエピソードを披露している。その上で、成仿吾はこうした自分の理解と見解を次の言葉に凝縮している。

私は、『沈淪』の主題を、愛の欲求あるいは求愛の心 Liebe-beduerftiges Herz という表現で示すことができると考えている。¹⁰

要するに、成仿吾は、『沈淪』の大胆な題材と描写に対して、「第一」という表現を用いて、高い評価を与えているが、作品の所々に存在している、主人公の日本で味わった個人の遭遇に起因する屈辱感、祖国が速く強くなってくれという願望などの表現に対して、現在、一般に定論として流通している「反封建主義」「反帝国主義」的な「愛国主義」であるという解釈とは、根本的に異なった見解を示しているのである。成仿吾は個別の政治的色彩を帯びる言葉に依ることなく、小説全体の描写表現から、作品の根底に潜む人物の心境情感の本質を把握し、小説の主題が、あくまでも「愛の欲求あるいは求愛の心」そのものであると結論付けている。今日から見ても、成仿吾は意識的に『沈淪』評論を個人的な感情と切り離し、批評家の良識に従って、友人の作品を見つめており、その姿勢は明確で、その見方も小説の実際の有り様に高度に一致する妥当な見解であったことが改めて確認できる。この点で、この最初期の成仿吾による同時代批評は、同時代人としての利点を生かした的確な批評であったと言えよう。

以上、最初期の代表的な『沈淪』評価を比較して見ると、茅盾、周作人、成仿吾は、それぞれ郁達夫の対立相手、中立者、仲間として、郁達夫との関係を異にするが、『沈淪』への視線は意外にも共通したものがある。特に論争相手の陣営に属する茅盾と概ね第三者の立場にある周作人が、当時「罵声」を浴びていた『沈淪』に対して、冷静な立場に立って論じたことは意味が大きい。そこには、積極的に欧米の文化、思想的観念を取り入れ、時代の先頭に立って行動するものとして、伝統的道德意識を反省し、中身から形式まで多少「常識」から外れた「反逆的」作品であっても、それを安易に拒否、非難したりせず、柔軟にそして冷静に受け止めようとする姿勢がはっきりあらわれており、その結論も非常に冷静かつ客観的なものであった。

本論は、郁達夫の『沈淪』を中心とした最初期の創作に関して特に次の点を強調しておきたい。すなわち、『沈淪』の出現は、中国近代文壇に、内容においても形式においても浪漫主義的及び「私小説」的な創作手法を生かし、独特の個性を有した作品を送り出したこと以上に、その既成の文学的観念、道德意識への反抗、及び事実上の社会的問題の提起、時代的情緒の表現としての意義の点で文壇ないし社会に大きな衝撃を与えた。それを契機としてあらわれた一連の動きは、封建的観念の縛りから人々を解放し、寛容で柔軟な態度で近代の作家とその文学とに向き合うことを可能にすることになった。『沈淪』はこのような意味で大きな貢献をしたのである。これは、『沈淪』に対する様々な意見の衝突の結果であり、作者にとっても予想だにできなかった収穫であっただろう。

四 鄭伯奇、陳西滢など：20年代中後期の郁達夫批評

郁達夫は、『沈淪』という衝撃的作品によって世間の注目を浴びた後、次々と新作を世に送り出した。その小説「友情和胃病」(1921. 10)、日記「蕪城日記」(1921. 11)、小説「茫茫夜」(1922. 3)、小説「血涙」(1922. 8)、小説「風鈴」(1922. 8)、「春潮」(1922. 11)、「採石磯」(1923. 2)、小説「蕪蘿行」(1923. 5)、小説「青煙」(1923. 6)、隨筆「還郷記」(1923. 7-8)「還郷後記」(1923. 8)、小説「秋河」(1923. 8)、小説「落日」(1923. 9)、隨筆「海上通信」(1923. 10)などは、彼の一貫して叙情的な風格を十分に發揮したもので、多くの読者に愛読されてきた。1923年10月、即ち『沈淪』が出版されて二年後、これらの作品を収めた、二冊目の作品集『蕪蘿集』(小説・隨筆集)が出版されることになった。このことは、郁達夫が作家として新たな段階に入ったことを示していると同時に、彼がすでに読者や批評者に認知され、その知名度はかなり高くなってきたことも示している。こうした状況に伴って、20年代中期以降、郁達夫批評研究も日々進展するようになった。彼の個別の作品に関する批評は、それまで印象的・感想的なものがほとんどだったに対し、この時期からは明らかにその深みを増し、本格的な批評或いは研究の領域に入り始めた。さらに彼の文学の全体像や作家として歩んできた人生も人々の関心・論議の対象となり、郁達夫文学批評の質は明らかに向上し、新しい局面に入ったのである。

ここでは、まず、陳西滢 (Chen Xiying, 1896-1970)^⑤ の論評を通して、郁達夫批評の新しい進展を見てみよう。上述のように、初期の郁達夫批評＝「沈淪」批評は、もっぱら「沈淪」における伝統的な倫理道德の無視、大胆な自己暴露に現われた作家の誠実さに注目し評価している。しかし、当時存在した「沈淪」批判の意見も一概に否定すべきではないだろう。文学作品も社会の一部分を構成するものである以上、作品はどのようなものを表現するのか、どのような形で表現するのかなど、様々な面で読者・論者からの問い、ないし批判をも含めた視点が現代の我々にとっては必要であると考えられるのである。その意味で、陳西滢の郁達夫批評は、複眼的な視線をもち、絶大な人気を有する「沈淪」に対し、賛美一辺倒にならず、その表現上の未熟さ或いは技術的技法的な完成度の不足を率直に指摘すると同時に、作品にあふれた内在的な人間的誠実さの魅力をきちんと捉えおり、独自の批評を構成している。

郁達夫先生の作品は、厳密に言うと、生活の断片にすぎず、短編小説としての形式をそれほど有してはいない。作品の主人公は、大抵、放浪中の不平不満を抱え、感情に富んだ、墮落した青年である。彼の作品は、なぜここから始まるのか、なぜここで終わるのか、いつもよく分からない。なぜなら、作品の始まる前にしても、終わった後にしても、同じような情緒は綿々としており、作者が書き続けていくなれば、永遠に終わらないからなのである。そのことから、彼はたまに終わってない作品を発表したとしても、読者は別に足りない感じもしない。逆に、「沈淪」のように、力強い結末をつけようとした場合、我々はかえって非常に不自然に感じるのである。この点で、彼の小説はやや単調な面があるのだが、彼の力量もここにあるのである。(中略) 新文学の作品は、短編小説の量が最も多く、質的にもその成果が一番大きいと思う。その中の代表的な作品としては、私は、郁達夫の『沈淪』と魯迅の『呐喊』を挙げたい。……彼(郁達夫一筆者)の小説の主人公は現代の青年の代表であると同時に、独自の生命力と強烈な個性をもつ青年なのである。^⑥

また、もう一人の「文学青年」黎錦明(1905-1999)は、その論評で『沈淪』の影響力が魯迅の『呐喊』より一層強いものだと断言し、『沈淪』の中国社会における多方面の影響をきちんと押さえ、そ

れをうまくまとめている。

伝統 (Tradition) と固定観念 (Convention) を打破したという『沈淪』の出現の意義は文壇に止まらず、今日の中国社会における、道徳上の変動の原動力は大胆に言うならば『沈淪』から発せられたと言えよう。今の性に関するオープンな論議の神聖な光も『沈淪』の導きによるものである。革命の面での、現在の青年の強烈な反抗意識も『沈淪』中の苦悩を極めた反応から生じたと言えるのである。『沈淪』は性の問題と革命に関する心理問題を記述したものではないが、その真摯な情感からの啓発 (Revelation) は『呐喊』の明解な激情より一層奥深いものであろう。²⁸

こうして、若干の歳月を経て、「沈淪」の「記念碑」的な意義についての再確認、再発見が行われ、「沈淪」認識は深みを増し的確なものとなり、その結果がそれ以降の「沈淪」評価の基本的な枠組みともなったことは、「沈淪」研究史のみならず、郁達夫研究史にも大きな意義を有している。

「沈淪」以降の作品について見るならば、例えば『蕩蘿行』は、作者自身の人生経験を連想させる語り方、その寂しく、悲しい情緒を極めた基調が読者の共感と注目を誘ったものとなっている。当時の読者の反応を調べてみると、郁達夫の知人の殷公武は、次のような読後感想を記している。「すぐにもそれ (『蕩蘿集』) を家に持ち帰り、じっくり読んでみたが、読むにしたがい内容に魅せられ、手放せなくなった。こうして、はじめて郁達夫の文学の魔力が大変なものであると分かるようになった。半ばまで読んで、思わず涙を流し、読み続けられなくなってしまった。」²⁹

萍霞の「読『蕩蘿集』」(1924. 12. 29) は、「この作品集は悲哀の結晶、一般人の悲哀の結晶」で、「生を求める叫び、人格のお守り」なのである³⁰と、『蕩蘿集』にあふれた人生の孤独感・悲哀感に大きな共感を示し、この作品を決して偽りも飾りもなく、個人の心境・感情をありのまま表現した「我々の文学の苑の美しい花」と、熱烈に賛美の辞を送っている。こうした当時の論者が感じ取った郁達夫作品の奇妙な魅力については、郁達夫の実際の作品内容に合致し、傾聴に値する。

若者の心理描写という点では、中国では、郁達夫がその特殊な手法をもって、成功を収めていた。彼の成功は確かに一般の作家を超えている。彼がいかにわがままでも、いかに悲観的でも、いかに人生をその暗黒な一面に閉じ込めようとも、彼は依然大勢の若者の心をとらえることができ、最も人を感動させる作家である。もちろん、これらすべてを、彼が若者の内外の苦しみを描き出し、あるいは大胆に自己を表現できた点に帰することはできないが、同時に、彼の作品には、極めて大きな力が秘められており、それは、彼が現実を描写する際、すべての若者に切実に関わる性愛、婚姻、教育、失業ないし最も根本的な社会制度の問題のそれぞれを読者の前に生き生きと随時必ず引き出してくるということである。³¹

全体的に、郁達夫、あるいは他の創造社作家の文学は、その暗い色調を帯びた「感傷的」「抒情的」な特徴が非常に顕著で、文章も分かりやすく、明快なものが多い。この点が、当時のほかの文学と異なり、若者を中心とした大勢の読者の共感と呼んだのである。例えば、同時代作家、郁達夫の友人でもある陳翔鶴は「その時、即ち民国十一年から十四、五年にかけて、もしも文学青年に「あなたの好きな中国作家は誰か」と尋ねたら、間違いなく郭沫若と郁達夫であると答えただろう」³²という証言を残している。

この時期、総合的な角度から郁達夫とその文学を検証、総括しようとする動きが現われた。郁達

夫の全集の出版をきっかけに、同じ創造社仲間の鄭伯奇 (Zheng Boqi, 1895-1979)⁸⁾ はその第一巻を取り上げ、批評を発表した。鄭伯奇は大局的な観点から郁達夫の文学に着目し、その文学の「基調」を「主観的記録」という一言に帰することができるかと断言した。

要するに、この『寒灰集』には様々なスタイルの萌芽が含まれてはいるが、その基調はまさしく作者の自己生活の記録である。それが、一つの主観的記録で、一人の転換期を生き抜いた者の生活記録である。しかし、この本の価値もここにあり、その永遠性もここにあるのである。

鄭伯奇は郁達夫と同じ陣営に属したが、意外にも冷静に仲間の文学を見つめ、その核心的部分を確実に把握する一方、作者への期待をこめた暖かい提言も忘れてはいない。

『寒灰集』の作者ははじめから主観的作家であるが、最近の彼の態度はその主観性をさらに徹底させるものであり、これは喜ばしい現象である。我々は彼にその主観性を人生の苦の奥底まで徹底させ、あるいはその主観性を人生・社会の全分野に押し広げさせてほしい。その時、中国の文壇には必ずより偉大にして不朽の作品が現れてくるだろう。⁹⁾

また、郁達夫文学のもう一つの重要な特徴を抒情主義の視点から捉え、郁達夫を当時の中国文学における抒情主義の「最もふさわしい代表的人物の一人」¹⁰⁾ としている。

鄭伯奇のこの批評は郁達夫批評史において極めて重要な意味があり、彼が適用した「作者の自己生活の記録」「主観性」「叙情性」という概念は今日でも郁達夫文学を評価する際に使用される最も基本的なキーワードである。彼の郁達夫文学に対する分析は今日の立場から見ても、極めて妥当であり、その有効性は全く失われていないと言える。現在、大学の文系で教材として広く使用される数種類の中国現代(近代)文学史は、鄭伯奇の八十年前に述べた郁達夫文学総括の「概念」を用い続けている。「教育部推薦中国語言文学類專業主要課程教材」である『20世紀中国文学史』(中山大学出版社1998年8月)でも、やはり「“自叙伝”色彩」「抒情特徴」のような視点や用語をもって郁達夫を語っている。錢理群・温儒敏・吳福輝『中国現代文学三十年』(「普通高等教育“九五”教育部重点教材」、1998.7 北京大学出版社)も、「一つの文学的潮流としての“自叙伝”的抒情小説の始まりは、やはり郁達夫の小説集『沈淪』なのである」と書いている。こうした見解は、容易に鄭伯奇の郁達夫叙述を想起させるのである。

また、『沈淪』から20年代末期までの郁達夫の創作における段階的変化については、鄭伯奇も、上に触れた黎錦明も、ともに1927年に、それぞれ『寒灰集』批評と「達夫の三時期」の中で、ほぼ同じような見方を示している。それは、つまり個人の実生活に基づき、普遍的な意味で魂と肉体との衝突をテーマとした「沈淪」期、個人の実生活をありのまま表現した「自己表現」の時期、小説「過去」に代表されるように、実生活の表現からやや脱して想像と虚構による作品を創作するようになる時期の三期である。こうした時期の区分は、作家と同時代の文学批評に基づくものであるにもかかわらず、80年後の今日でもほぼそのまま使用されており、そこには、批評家の確かな「史眼」と文学批評の能力が示されていると言えるとともに、現在の郁達夫研究は如何にして過去の「遺産」を活用しながらも、今日という時代にふさわしい視点からより緻密な分析・検証作業を進めるかということが、ますます重要になってくるのである。

おわりに

以上、郁達夫の同時代批評、特に1920年代の主要な批評作品に焦点をあてて、その流れを整理し考察を行った。それを通じて、以下の点が確認できた。

まず、20世紀20年代初頭から今日までの郁達夫研究史、批評史において、20世紀20年代の同時代批評は特に大きな意義を有している。その十年間に、郁達夫の批評者、読者による郁達夫文学の特質に対する把握、郁達夫文学の時期区分、郁達夫文学の技巧特徴の面での独自性、郁達夫文学のそれぞれの時期に示された時代的意義、彼の人間性や性格とその文学の関係などの重大な問題、その問題を解明するための基本的な枠組みやキーワードなどが、ほとんど提示され、結論もひとつおき提出された。その枠組み、キーワード、ないし結論の大半は今日でもその有効性を失ってはならず、現在の研究者に受け継がれ、今も研究や批評の中に生きているのである。そういう意味で、今日の郁達夫研究は、その一部で、過去の「遺産」に依存しながら、それを「無視」したまま、あまり意味のない再生産を続ける傾向が否め無いのである。従って、今求められていることは、そうした現実を直視し、どのように新しい研究を創出するかを考えることである。

次に、1920年代における郁達夫批評の揺れの軌跡、その文学の読みについての時代ごとの変化は、その後の長い歳月の中、ほぼそのまま繰り返された点である。新中国時代の1950年代から70年代までの郁達夫認識は1920年代後期の状況に非常に似ている。作家自身とその文学に対して、人間的文学的なものをほとんど排除し、硬直した共産主義理論、特に階級闘争理論をもって、共産主義的か資本主義的か、革命か反革命か、進歩的か頹廢的か、など、安易に政治的裁断を下す風潮はその時代の常套であった。1980年代から、ようやく転機が現れ、次第に比較的自由な状態の下、様々な視点から郁達夫とその文学は語られるようになった。今後、作品全体の描写や表現から作者の伝えたかったこと、実際読者に伝わったことを詳細に検討する必要があると思われる^①。概観であるが、80年代以来、出版・発表された専門研究書は20種類余り、研究論文は3000篇以上にも達している^②。この60年前と60年後の郁達夫研究の軌跡の重なりについては、其の共通点に対しても相違点に対してもより詳細に考察を行うべきであると考えている。

第三に、今後如何にして1920年代の郁達夫の読みや批評の的確さ、その多くの蓄積を生かし、すでに取り上げられた課題を深めさせていくか、さらに新たな分野や境界の開拓に繋げるかという問題である。例えば、郁達夫を特異な人物としてではなく、普通の人間として捉え、実証的な伝記的研究を行うことでその波乱に満ちた人生を改めて見直すこと、作家の性格気質、社会的倫理的感情、恋愛・情愛観、などの角度から、より作家の真実に近づくことが十分に可能であるし、大いに必要でもありと考えられ、郁達夫の小説と日本の私小説との関連問題においても、単なる二者を並べて対照するのではなく、私小説の性質や各種要素をよく把握した上で、郁達夫の日本文学摂取及び独自性の保持を様々な角度から考える必要性も大いにあるのではなかろうか。作品研究も、テキスト内部の構造などに対するの、精査作業もかなり不十分であると言えよう。いずれにしても、現代においては、これまでの郁達夫研究の遺産を確実に受け継ぎながら、的確な論究を通じて、新しいパラダイムを創出するのが、今後の大きな課題となるのである。

注

- ① 本稿の修正増補にあたっては、当時横浜市立大学名誉教授、関東学院大学教授であった鈴木正夫先生と九州大学大学院言語文化研究院准教授の秋吉收先生から、貴重な意見やアドバイスを

数多くいただいた。また、九州大学大学院博士後期課程在学時代の指導教官、現熊本学園大学外国語学部教授である岩佐昌暉先生からも、たいへん重要な指摘をいただいた。以上の先生方に心より感謝を申し上げる。

なお、郁達夫の作品の引用に関しては、特に注がない場合、いずれも最新版『郁達夫全集』（2007.11浙江大學出版社）による。

- ② 郁達夫研究史を振り返ってみると、その全体はおおむね次のようないくつかの段階に分けられる。第一段階は、郁達夫の同時代批評から1949年の新中国建国まで、第二段階は1949年から1980年代初頭まで、後者においては、極端と言えるほどの「社会主義革命」イデオロギーによって厳しい思想統制がなされ、正常の文学研究が存在しない状況であった。第三段階は、1980年代以降である。ある意味、第三段階は第一段階に連続するものでもあるが、中国社会の改革開放につれて、特に欧米の文学研究の観念や方法などを取り入れ、様々な視点から郁達夫研究が行なわれるようになってきている。
- ③ 郁達夫の文芸創作は漢詩から始まる。16歳（1911）の時発表した「詠史」は現在確認できる最初のもの。初めて発表した小説は1921年7月7日～9月13日『時事新報』副刊「学灯」に掲載された「銀灰色的死」であった。
- ④ 楊暉「試論郁達夫の成名与上海文化的關係」、『山東社会科学』1999年代5期。
- ⑤ 郁達夫『『鶏肋集』題辭』（1926.10創造社出版部『鶏肋集』）、『郁達夫全集』第10巻301頁。
- ⑥ 郁達夫『『鶏肋集』題辭』（1926.10創造社出版部『鶏肋集』）、『郁達夫全集』第10巻301頁。
- ⑦ 中国の作家、教育者。湖南省新化県出身。日本に留学し旧制六高、東京帝国大学工学部などに学ぶ。1921年（大正10）郭沫若、郁達夫らと創造社を組織し、評論を中心に活躍した。大革命挫折後、28年に論文「文学革命から革命文学へ」を発表、無産階級文芸を提唱し革命文学運動のなかで指導的な役割を果たした。28年日本を経由してヨーロッパに留学し31年帰国。その後は陝西ソビエト区に入り、陝北公学校長など教育運動を主に活躍した。55年（昭和30）来日。中国教育協会名誉会長、中国人民大学校長などを務める。著書としては評論・小説集『流浪』（1927）、評論集『使命』（1927）などがある。『日本大百科全書』（1971小学館）などを参照。
- ⑧ 茅盾は、中国の小説家、評論家。本名は沈徳鴻、字は雁冰。中国現代史と人間の関わりを描いた小説を多く書き、代表作に『子夜』『霜葉は二月花よりも紅く』など。1949年から65年まで中華人民共和国文化部長を務めた。近代中国最大の共産作家と称される。16歳の時、上海の出版社商務印書館に入社。1920年に中国共産党に入党する。1921年に近代文学運動の結社「文学研究会」設立に参加し、22年までその機関誌「小説月報」の編集を務め、外国文学の紹介や、自然主義、写実主義に関する評論を執筆した。『日本大百科全書』（1971小学館）などを参照。
- ⑨ 茅盾「通信」、1922. 2『小説月報』13巻2号。
「『沉淪』中三篇、我曾看過一遍、除第二篇銀灰色的死而外、餘二篇似皆作者自傳（據友人富陽某君說如此）、故能言之如是真切。第一篇沉淪主人翁的性格、描寫得很是眞、始終如一、其間也約略表示主人翁心理狀態的發展；在這點上、我承認作者是成功的；但是作者自敘中所說的靈肉衝突、却描寫得失敗了。」
掲載に当たっての論文の文字数制限により、基本的に引用文の中国語原文を略すことにする。
- ⑩ 損（茅盾）『『創造』給我的印象』、1922. 6. 1『文学旬刊』第39期。
- ⑪ 中国の散文作家。啓明、知堂などの別号のほか多くの筆名がある。浙江省紹興の人。兄魯迅に続いて1906年（明治39）日本に留学、立教大学に学ぶ。この間兄弟で翻訳小説集『域外小説集』

2冊を出した。辛亥革命（1911）直後に帰国、のち北京大学に迎えられ、おりからの文学革命運動に呼応して「人の文学」「思想革命」などの評論により、言文一致を標榜する運動に個人主義的ヒューマンイズムの内容を付与した。同時に、日・英・ギリシア3か国語に通じ、古今の海外文学を精力的に紹介、その質実な翻訳文体は口語による文章語の形成にも大きな貢献をした。作家としては早くから自由な小品散文の中国独自の可能性を洞察し、『雨天の書』（1925）以下20余冊の随筆群を遺した。それらは近代の合理主義に洗われた伝統的な文人筆記の最後の高峰の観を呈している。20年代中ごろから、激烈に展開する革命運動との間に距離を生じ、しだいに反時代的な隱逸の風を深める形でなお初心に執したが、日中戦争期間中、不幸にして北京の対日協力政権に参与、戦後国民政府の手で投獄された。同政権崩壊前夜（1949）に釈放され、人民共和国ではおもに『魯迅の故家』（1953）のような魯迅関係の著述と日本文学の翻訳に従事、香港からは自伝『知堂回想録』（1970）などが出ている。『日本大百科全書』（1971小学館）などを参照。

- ⑫ 鈴木正夫『郁達夫——悲劇の時代作家』（1994. 7 研文出版）6頁を参照。
「沈淪」が性を公然と描いて見せたことは、封建的道德の束縛の強い中国にあっては、誨淫、不道德の書であるという強い非難を浴びることになり、理解者が得られなかった。窮地におちいった郁達夫は当時、北京大学教授で、創造社より半年前、中国で最初に結成された近代文学団体文学研究会を発起した一人、そして人道主義の文学を唱えていた周作人にこの書を送って批評をもとめた。周作人は、いわゆる不道德な書を分類説明した上で、「沈淪」を「猥褻な要素はあるが、特に不道德な性質のものではない」「『沈淪』は芸術的な作品であるが、「受戒者の文学」（Literature for the initiated）であって、一般人の読みものではない」と擁護した。
- ⑬ 『中華書局収蔵現代名人書信手跡』（1992. 1 中華書局）。『郁達夫全集』第6巻（2007. 11 浙江大学出版社）もそれに依る。葉書の英文の日本語訳は李による。
- ⑭ 周作人「『沈淪』」。引用は初出の『晨报副鐫』1922年3月26日第一版による。
- ⑮ 周作人「『沈淪』」参照。
- ⑯ 郁達夫「『鷄肋集』題辭」（1926.10 創造社出版部『鷄肋集』）、『郁達夫全集・第10巻』301頁、浙江大学出版社、2007年11月。
- ⑰ 蘇雪林「郁達夫論」（1934. 9 『文芸月刊』6巻3期）、引用は『郁達夫研究資料・下』382頁による。
- ⑱ 成仿吾「『沈淪』的評論」、1923. 2 『創造』季刊1巻4期。
- ⑲ 成仿吾「『沈淪』的評論」
- ⑳ 成仿吾「『沈淪』的評論」
- ㉑ 陳西滢、江蘇省無錫出身。本名は陳源。ペンネームは西滢。1912年、英国の高校に入学、1922年、ロンドン大学で博士号取得。帰国後、北京大学教授に迎えられる。後に『現代評論』などを創刊。特に随筆の創作が有名。1940年代からほとんどヨーロッパで生活。1970年に亡くなる。著作に『西滢閑話』（1928）、『西滢後話』（1931）などがある。
- ㉒ 西滢「閑話」、1926.4 『現代評論』3巻71期。
- ㉓ 錦明「達夫的三時期——『沈淪』—『寒灰集』—『過去』」（1927. 9 『一般』3巻1期）。引用は『郁達夫研究資料・下』332頁による。
- ㉔ 殷公武「『蕙蘿行』的讀後感」、『晨报副鐫』1924年3月9日。
- ㉕ 萍霞「讀『蕙蘿集』」、『京報副刊』1924年12月29日。
- ㉖ 秀子「郁達夫の思想和作品」（1936. 3. 3、4、6、8、10 『福建民報・小園林』）、『郁達夫研究

資料・下』405-406頁。

- ⑳ 陳翔鶴「郁達夫回憶瑣記」（1947.3『文芸春秋副刊』1巻3期）、『郁達夫研究資料・上』106-107頁。
- ㉑ 中国の作家。陝西省長安県出身。1917年（大正6）日本に留学し旧制三高、京都帝国大学文学部などに学ぶ。少年中国学会会員。三高在学中に創造社に参加し、22年愛国的情緒の濃い処女作『最初の授業』を発表した。26年帰国。創造社のなかでつねに中堅の位置を占め活躍した。29年上海芸術劇社を組織、30年中国左翼作家連盟に加入し、その後、明星影片公司編劇顧問を務めるなど無産階級演劇映画運動の発展に貢献した。編集者としても優れ『中国新文学大系』『毎月文庫』などの編纂にも従事した。新中国建国後は中国作家協会理事などを務めた。著書に戯曲集『抗争』（1928）、短編集『灯火機』（1936）などがある。『日本大百科全書』（1971小学館）などを参照。
- ㉒ 鄭伯奇『寒灰集』批評、1927. 5. 16『洪水』3巻33期。
- ㉓ 鄭伯奇『寒灰集』批評、1927. 5. 16『洪水』3巻33期。
- ㉔ 近年、わずかではあるが、「沈淪」に対して、こうした「愛国主義」的な解釈を行うことの問題点を指摘する論が登場してきた。楊小旭「性格悲劇還是社会悲劇——「沈淪」文本的再解讀」（2006. 7『陝西師範大学学报』第35巻 專輯）では、現在の大部分の文学史や「沈淪」解説は、あまりにもイデオロギー的に作品のテーマを捉え、小説に「愛国主義」を見すぎているという傾向を指摘し、「沈淪」は極めて個人化した作品で、「性欲の衝動」や心理世界の深層への大胆な描写を通じて、個性の解放や自由を求める作家の願望を示していると主張した。
- ㉕ 劉茂海「新時期以来郁達夫其人其作研究総述」（『西北第二民族学院学报』2007年第1期）を参照されたい。